

教員免許取得希望学生における水泳授業に対する意識と実態

Attitudes toward Swimming Lessons among University Students Wishing to Obtain Teaching Licenses

澤田 有里*・益川 満治**
Yuri SAWADA*・Mitsuharu MASUKAWA**

要 旨

本研究は、教員免許状取得希望者を対象に、水泳授業における過去の経験や水泳に対する意識及び泳力について調査を行うことであった。その結果以下の知見を得た。

- ◆ 水泳授業の実施は、小・中・高と校種が進むにつれ実施率が下がることがあきらかとなった。
 - ◆ 水泳を得意としている者約40%、好きな者約45%、授業を上手に行えると回答した者約25%であった。
 - ◆ 着衣泳の経験あり約45%、スイミング経験あり約43%であった。
 - ◆ 可泳距離とスイミング経験の関係から、スイミング経験と泳力には関係が見られた。
 - ◆ 自身のこれからの水泳指導について、自身の泳力や水に対する不安、恐怖感が抽出された。
 - ◆ 今までの水泳授業に対し、泳力、指導、環境についてネガティブな感情をもっていた。
 - ◆ 印象に残る水泳授業として、泳法の指導よりも、水遊びに関することが抽出された。
- 以上を踏まえ、これからの教員養成課程における水泳指導法について検討を行う必要がある。

キーワード：水泳、着衣泳、可泳距離、スイミング、授業

1. 緒言

水泳は、生涯スポーツの観点からも注目されているスポーツである。全国で週1回以上水泳を行う者の割合が8.9%であり、20代が14.3%と報告されている（Re-science ベネクス，2022）。小学生の習い事においても第1位となっており（ベネッセ教育総合研究所，2024），多くの人々が水泳を行っていることが予見される。しかし、毎年多くの水難事故が発生し、令和5年夏季（7～8月）の発生状況は453件・568名と多く、このうち中学生以下は49件・106名であったと報告されている（警察庁生活安全局生活安全企画課，2023）。学校体育においても水泳系の授業が小学校・中学校・高等学校において行われており、これら多くの事故について体育授業の中で検討を行う必要がある。

水泳系の学習の特徴は、「水の中で運動する」との

点で、陸上における各種の運動と違う点を理解することが重要である。特に、水の物理的特性を理解することについて、「水泳系で求められる身体能力を身に付けること、また、水中での安全に関する知的な発達を促すこと、さらに、水の事故を未然に防ぐ論理的な思考力を育むこと」の学習に大きく関係していると記されている（学校体育実技指導資料 第4集 水泳指導の手引（三訂版），2014）。

また、水泳系領域の内容は、①水慣れ・水遊び、②初歩的な泳ぎ、③泳法の大きな3段階の指導が発展していくように考えられている。小学校では、①の時間を確保し、楽しい水泳の授業を行うことが大切であり、中学校・高等学校でも準備運動の中で、①と②は適宜取り扱うことで、泳法の習得や、技能の向上を図ることにつなげていくことが重要である。特に水泳系領域の授業において泳ぎの経験が少ない者にとっては、不安感や恐怖心を伴う活動であること、水中では

* 青森県立青森中央高等学校
Aomorichuo High School, Aomori prefectural

** 弘前大学教育学部保健体育講座
Department of Physical Education, Faculty of Education, Hirosaki University

呼吸ができないことから一步誤れば生命を失うことが懸念される。このため、児童・生徒一人一人が、水の危険から自己の生命を守るとともに、事故に遭遇したときの対処の仕方等を身に付けておく必要がある。学習指導要領解説では、水泳の事故防止に関する心得等について、小・中学校では必ず取り上げることとされている（学校体育実技指導資料 第4集 水泳指導の手引（三訂版），2014）。

寺本ほか（2017）は小学生及び小学校教員に対し、水泳授業に対する実態調査を行っている。その中で、児童においては、「水に入るのが楽しい」や「もっと水泳が上手になりたい」といった回答が多くみられ、「水が怖い」との回答は極少数であった。また、教員においては、指導力に自信がないと回答した者が75.4%であったことを報告している。

このことから、小学校教員や中学・高等学校保健体育教員を目指す学生にとって、どのような授業を行うことが重要か検討する必要がある。そこで本研究では、教員免許取得希望者を対象に、水泳授業における過去の経験や水泳に対する意識及び泳力について調査を行うこととする。このことで、小学校教員及び中・高体育教員養成における水泳指導の基礎資料となり得ると考える。

2. 方法

1) 調査時期及び対象

2024年5月、「小学校体育科教育法」授業内において、学生94名（男子32名；女子62名、2年生91名、4年生3名）を対象に調査を行った。なお調査は、Web アンケート（Google フォーム）を用いて行った。

2) 調査内容

①フェイス項目

フェイス項目として、学年、性別、取得希望教員免許種、出身小学校・中学校・高等学校所在地を調査した。以下、表1に詳細を示す。

表1 対象者の性別及び学年、取得希望教員免許種

性別	度数, 名	割合, %
男	32	34.0
女	62	66.0
学年	度数, 名	割合, %
2年生	91	96.8
4年生	3	3.2
取得希望教員免許種	度数, 名	割合, %
小学校	82	87.2
中・高（保健体育）	6	6.4
その他	6	6.4
計	94	100.0

表2 対象者の出身校の所在地

出身校	青森県	岩手県	秋田県	北海道	その他の都府県
小学校	48	10	3	7	26
中学校	49	10	3	6	26
高等学校	48	10	3	6	27

（単位：名）

②水泳に関する調査

水泳に関する調査として、水泳授業についての意識及び経験、スイミングスクール経験、泳力についてとした。以下表3にまとめた。

表3 調査内容

【自身について】
クロールの泳力
平泳ぎの泳力
可泳（自身が泳げる）距離について
スイミングスクールに通った経験の有無
【授業経験】
小学校・中学校・高等学校の時に授業実施経験
この領域について「得意」「好嫌」「うまく授業が行えるか？」
この領域について「授業で泳ぎはうまくなるか？」
水泳授業での距離を測るテストの有無
着衣泳の授業の有無
授業時に技能面の指導の有無
【自由記述】
水泳授業で怖かったことや嫌だったこと
水泳授業で一番印象に残っていること
自身が水泳授業を行うこと（指導・管理）について、思うこと

4) 分析及び倫理的配慮

本研究で得られたすべてのデータについて、各問の回答を度数分布及びクロス集計を用いて集計した。また、自由記述の回答については、KJ法を用いて整理

した(川喜田, 1970)。また、倫理的配慮として調査対象者には、事前に口頭で研究の内容や目的、参加・不参加は自由意志であることを説明し、承諾をWeb上で得て行った。

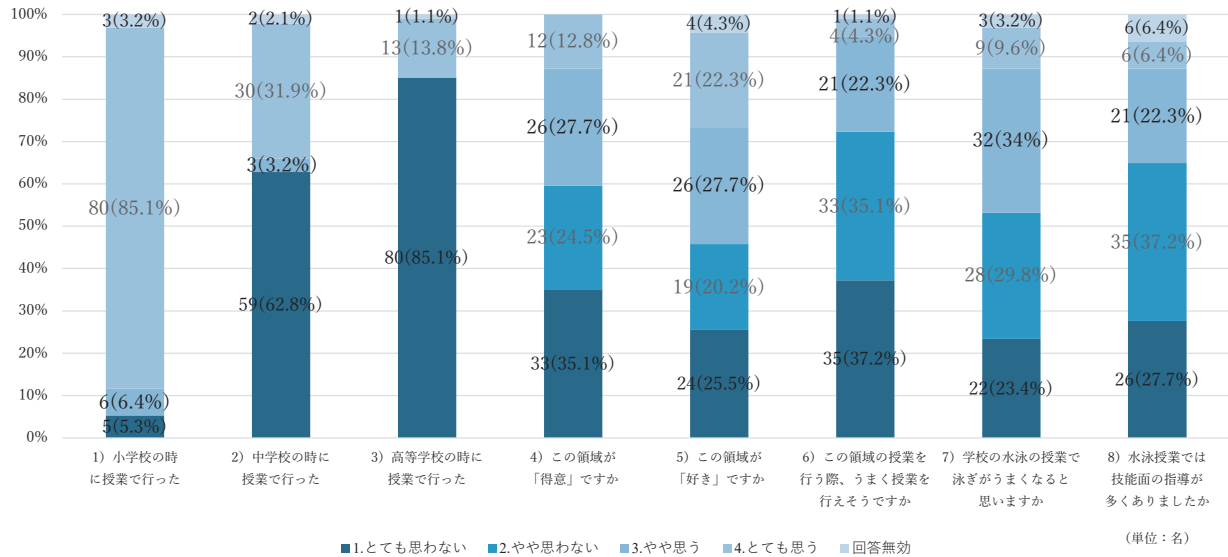


図1 授業経験における主観的評価

3. 結果及び考察

1) 授業経験における主観的評価

回答結果を図1に示した。水泳授業を行ったという回答は、「とても思う」と「やや思う」を合わせると、小学校86名(91.5%)、中学校33名(35.1%)、高等学校13名(13.8%)であった。「とても思わない」と「やや思わない」の回答を合わせると、小学校5名(5.3%)、中学校59名(62.8%)、高等学校80名(85.1%)であった。つまり、小・中・高と学校種が上がるにつれて水泳授業の実施率が下がっていくことがあきらかとなった。澤田(2020)は、全国及び青森県内の水泳授業実施率を調査し、中学校の授業の割合は、全体52.1%、青森県20.8%、青森県以外71.4%、高等学校では、全体34.2%、青森県9.4%、青森県以外49.2%であったことを報告している。本研究において、青森県内出身者が多いことから水泳授業実施率の低さが想定される。

本領域に対する「得意」かどうかについて、「とても思う」が12名(12.8%)、「やや思う」が26名(27.7%)、「やや思わない」が23名(24.5%)、「とても思わない」が33名(35.1%)となった。約4割の学生が得意と回答していたが、残りの6割が不得意と回答していた。水泳は、陸上における運動とは異なり水を媒体とした運動で、呼吸制限があることや、身体を

支える固定した支持点がないため、水泳に対する恐怖心や不安などの心理的要因が水泳学習での泳力に影響しているといわれている(水泳連盟, 2002)。本研究においても、不得意と感じる学生は、水泳に対するネガティブな心理的要因が関係している可能性があるため、今後検討する必要がある。

本領域に対して「好き」かどうかについて、「とても思う」が21名(22.8%)、「やや思う」が26名(27.7%)、「やや思わない」が19名(20.2%)、「とても思わない」が24名(25.5%)となり、半数以上の学生が嫌悪感をもっていることがわかった。中学生・高校生における水泳授業に対する意識調査においても、中学生で37.4%、高校生で54.5%が「とても好き、まあ好き」と回答しており、本研究においても同様の結果と考えられる。しかし、今後水泳授業を担当する可能性がある本研究対象者において、水泳に対し好意度を高める試みが必要である。

水泳の授業をうまく行えそうかの質問については、「とても思う」が4名(4.3%)、「やや思う」が21名(22.3%)、「やや思わない」が33名(35.1%)、「とても思わない」が35名(37.2%)という結果となり、不安を感じている学生が多いということがわかった。本結果は、上述した、水泳に対する「得意」や「好き」が影響を与えている可能性がある。また、回答者の多

くが2年生であり、集中実習も経験していないことから、大学で行う水泳実習において、指導法や安全管理などの享受が重要と考える。

学校の水泳の授業で泳ぎがうまくなると思うかの質問については、「とても思う」が9名(9.6%)、「やや思う」が32名(34.0%)、「やや思わない」が28名(29.8%)、「とても思わない」が22名(23.4%)となった。三宅(2003)は、水泳学習経験があるのに関わらず泳げない学生に対し調査を行い、不安や恐怖感のみならず、体育授業自体が原因であることを言及している。このことから、泳力指導もさることながら、安全面、不安面にも配慮した授業が重要である。

水泳授業で技能面の指導が多くあったかの質問については、「とても思う」が6名(6.4%)、「やや思う」が21名(22.3%)、「やや思わない」が35名(37.2%)、「とても思わない」が26名(27.7%)となり、技能面の指導はそれほど行われていないということがわかった。寺本(2017)の報告においても、水泳の指導力に不安を持つ教員が75.4%いることが示されており、授業現場での直接的介入(具体的な指導)があまり行われていないことが推察できる。

2) 水泳授業で距離を測るテストの有無について

回答結果を図2に示した。水泳授業で距離を測るテストがあったかどうかの回答は、「あった」が63名(67.0%)、「なかった」が31名(33.0%)となり、半数以上の学生が距離を測るテストがあったことがわかった。本研究では、小・中・高のどの学校種で距離を測るテストがあったかまでは調査を行っていない。しかし、水泳系領域の内容は、①水慣れ・水遊び、②初歩的な泳ぎ、③泳法の大きな3段階の指導が発展していくように考えられている(学校体育実技指導資料第4集 水泳指導の手引(三訂版), 2014) ことから、①や②といった段階を踏まえて指導が行われているか懸念がある。今後、水泳授業の系統性も含め検討する必要がある。

3) 着衣泳の授業の有無について

回答結果を図3に示した。着衣泳の授業はあったかどうかの回答は、「あった」が43名(45.7%)、「なかった」が51名(54.3%)となり、着衣泳がなかった学生の方が多い結果となった。着衣泳は、呼吸を確保し救助されるまで浮き続ける自己保全を目的とした対処法である(海上保安庁, 2018)。水難事故においても、中学生以下の割合が多いことが報告されている。

4) スイミングスクール経験の有無について

回答結果を図4に示した。スイミングスクールに通ったことがあるかどうかの回答は、「ある」が41名(43.6%)、「ない」が53名(56.4%)となり、半数以上の学生がスイミングスクールに通ったことがないことがわかった。小学生がしている習い事1位が水泳であり(ベネッセ教育総合研究所, 2024)、幼児・児童期でのスイミング経験が現在の泳力や好嫌、得意不得意に影響していることは大いに予想できる。しかし、小学生でもっとも人気のある「水泳」は、中学生の習い事としては、大きく順位を落とすことが指摘され、水泳を小学校高学年から中学生にかけてやめる割合が高いことが指摘されている(中学生白書, 2020)。これらは、生涯スポーツや体育の目標である「豊かなスポーツライフを実現する資質・能力」の育成にも関わることとして注意深く見ていく必要がある。

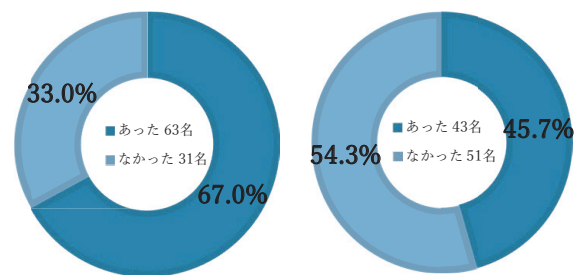


図2 距離測定テストの有無

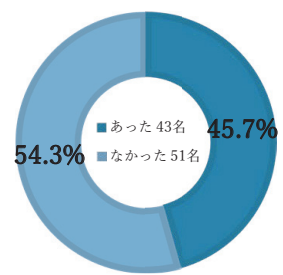


図3 着衣泳の有無

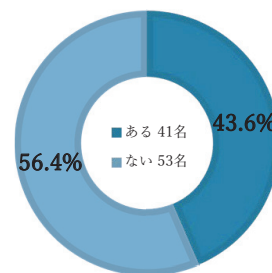


図4 スイミングスクール経験の有無

5) 可泳距離とスイミングスクール経験の有無

可泳距離を、①泳げない、②15m程度、③25m、④50m、⑤それ以上と分類した。スイミングスクール経験は、「通ったことがない」及び「通ったことがある」に2つに分類した。可泳距離及びスイミング経験についてクロス集計を行った。クロールにおける、可泳距離とスイミング経験のクロス集計の結果を、図5に示した。スイミングスクールに通ったことがないと答えた人の中で、①泳げない(19名, 35.8%)、②15m程

度（9名，17.0%）、③25m（21名，39.6%）、④50m（3名，5.7%）、⑤それ以上（1人，1.9%）となり，25m以下の割合が49名（92.4%）であった。スイミングスクールに通ったことがあると答えた人の中で，①泳げない（2名，4.9%）、②15m程度（4名，9.8%）、③25m（11名，26.8%）、④50m（12名，29.3%）、⑤それ以上（12人，29.3%）となった。この結果から，クロールの可泳距離には過去のスイミング経験が影響を与えている可能性が示唆された。

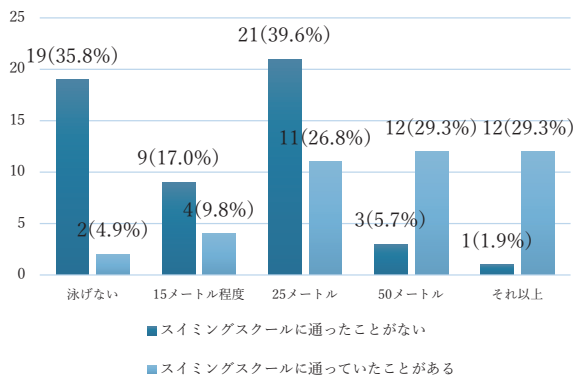


図5 クロール可泳距離とスイミングスクール経験の有無の関係

次に，平泳ぎにおける，可泳距離とスイミング経験のクロス集計の結果を，図6に示した。スイミングスクールに通ったことがないと答えた人の中で，①泳げない（28名，52.8%）、②15m程度（12名，22.6%）、③25m（10名，18.9%）、④50m（2名，3.8%）、⑤それ以上（1人，1.9%）となり，25m以下の割合が50名（94.3%）であった。スイミングスクールに通ったことがあると答えた人の中で，①泳げない（5名，12.2%）、②15m程度（4名，9.8%）、③25m（10名，24.4%）、④50m（9名，22.0%）、⑤それ以上（13人，31.7%）となった。平泳ぎにおいても，クロールと同様に可泳距離にスイミング経験が影響を与えていることが推察できる。

田場ほか（2017）は，泳げるということに対して身体的特徴が及ぼす影響は極めて低く，これまでの「習い事」（水泳・スイミング）経験が大きく影響していると指摘している。本研究においては，統計的検討は行っていないが，先行研究を支持する結果を示していた。今後は，可泳距離とスイミング経験について検討を行い，泳力を踏まえた授業づくりの検討が必要である。

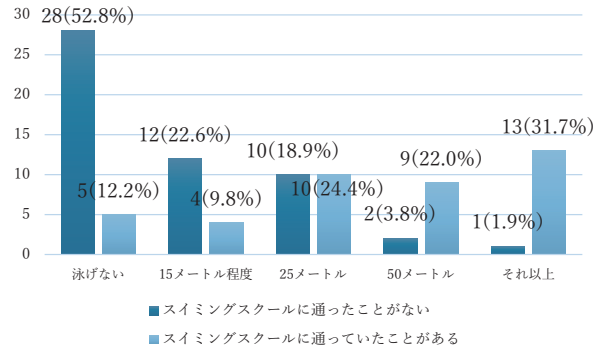


図6 平泳ぎ可泳距離とスイミングスクール経験の有無の関係

6) 自身が水泳授業を行うこと（指導・管理）について思うこと

自由記述の回答について，KJ法を用いて分類を行い，その結果を表4に示した。「指導に関すること」として，自身の泳力や水に対する不安，恐怖感を感じる回答が多くみられた。また，実際の授業において，指導方法に不安や課題を感じている回答や安全面に対する回答もみられた。三宅ほか（2004）は，泳げない者は，運動有能感における，身体的有能さの認知が低く，不安感や嫌悪感が高いことを報告している。つまり，泳ぐという課題に対し，自身の身体を用いた解決ができず，不安感や嫌悪感を高め，泳力に影響を及ぼしている。本研究の結果を踏まえると，泳げない者や不得意と捉える者に対し，その者のもつ原因帰属を見極め，泳力を高めるだけでなく，身体的有能さの認知を高めるアプローチを行い，不安感や嫌悪感を取り除くことが重要である。そのことで，指導や管理に対する認知の変容が可能となる。

7) いままでの水泳授業で怖かったことや嫌だったこと

回答の集計結果を表5に示した。その結果，5つの主だった表題が示された。1つ目は，指導に関することで，自身のレベルに合わない指導や指導者の問題点が抽出された。2つ目に，泳力に関することで，泳げないことや水への恐怖感が多く抽出された。3つ目は，プール環境についてで，衛生面や暑さ・寒さといった天候，水深等が抽出された。4つ目は，男女共習に関することであった。5つ目は，テストに関することで，泳ぐ速さや距離の課題に対し，ネガティブさを感じさせる記述がみられた。近年，水泳施設の老朽化が問題視され（NHK，2022），衛生面への影響も懸念される。また，水泳指導を民間委託する動きが活発化し（朝日新聞デジタル，2023），小学校種では教員

が指導しないことが増えている。しかし、体育授業を通し様々なことを学ぶことが目指されている中、いわゆる「専門家」という方々に任せることが、本当の学習に繋がるかは疑問が残る。但し、泳げない者やネガティブな感情をもつ者にとっては、心強いと考えられることから、教員と専門家が共に、生徒の学習を促進できる環境づくりを行えることが重要である。

8) いままでの水泳授業で一番印象に残っていること
回答をまとめた結果を表6に示した。印象に残った点として、泳法の指導よりも、水遊びに関することが

抽出された。流れるプール（集団でプール内に水流を作り出す）や水の中で、浮く、潜る等、水慣れ等の内容も含んでいた。また、ネガティブな回答も抽出され、プール環境に関する点、長時間の水泳等が抽出された。調査対象学生にとって、水泳指導において印象に残る部分が泳法の指導より、水慣れ、水遊びの内容であることがあきらかとなった。このことから、小・中・高で行う水泳指導においては、水慣れ・水遊びや浮く・沈む等の水の中で楽しさ・心地よさを享受することが重要と考える。

表4 自身が水泳授業を行うこと（指導・管理）について思うこと

【指導者に関すること】
監督（指導者）が少ないため、人数を確保できるかが不安
【指導に関すること】
自分自身が泳いだり潜ったりすることが出来ないため、指導を行うのが不安
水泳授業を受けたことがない自分が教えることが出来るのか不安
自分で泳ぐことすら完璧ではないのに、泳ぎ方に関して指導することが不安
自分が泳げないため、指導できるか不安
上手に教えられるか心配
児童の体力に合わせた、授業をできるか不安
水に対して恐怖心を抱く児童への指導が不安
自分自身が水に対しての恐怖心が強く、指導できる自信がない
自分自身が水泳に苦手意識があるため不安が大きい
さまざまな泳力の人が楽しめる授業をしたい
水に親しむ楽しさを味わって欲しいので、なんとか恐怖心を取り除きたい
水に潜らない子への対応に悩む
体にコンプレックスがあり、生徒の前で水着を着たくない
自分が苦手なせいで子どもたちも苦手意識を持ってしまったら不安
スイミングに通っている子どもとそうでない子どもではできる範囲が大きく変化してくると思うためまとめて授業ができる自信がない
苦手な子供が萎縮せずに泳ぐことの出来る授業をしたい
泳ぐ事を好きになってもらいたい
【安全面に関すること】
溺れた生徒を助けられるか不安
児童の安全管理が不安・心配
子どもたちが危険な状況の時に助けられるのか不安
怪我などが心配
大人数の生徒の安全に注意しながら授業ができるかどうか不安
児童への注意喚起
溺れてる人がいないか確認すること
自分自身が泳げないので、安全管理の面で不安

表5 いままでの水泳授業で怖かったことや嫌だったこと

【指導に関すること】
<p>ほんとに泳げない人が上達しないのを本人の努力の問題にするところがすごく嫌 個人個人の泳ぎを、授業受けている人全員の前で見られるのが嫌 なにか固定されているものに捕まっていない状態で水中にいるのが不安 自分のレベルにあった指導をしてもらえなかった 飛び込み 最初に潜る時 顔を水に付ける練習のときに長時間頭を押さえつけられて苦しかった 男女混合 ビート板で泳いでいた最中にビート板を勝手に先生に取られた 「お母さんのお腹の中にいたときは水の中で浮くのに、なぜ今できないのか」と叱られた</p>
【泳力に関すること】
<p>鼻が痛い、水が怖かった 他の人と比べて全く泳げなかった 泳げなかった時、泳げないことが恥ずかしかった 泳ぐことが苦手だったので、水泳の授業自体が嫌 鼻に水が入る 息継ぎができないので水の中では息が続かなくて、聞こえないし話せない、顔を水につけるのが怖い 苦手な水泳でみんなと一緒に泳がないといけない 水に顔をつける 鼻に水が入る 溺れる</p>
【プール環境に関すること】
<p>プールに虫が浮いている シャワー 寒い 足がつかない プールの施設が汚い 脱衣所を素足で歩きたくなかった 待ち時間が多く、暑いプールサイドでひたすら待たされた 蒸し暑くて嫌 水が冷たくて嫌 柵に足が挟まる</p>
【テストに関すること】
<p>水泳の何メートル泳げたかを図るのが嫌 タイム測定・テスト テストの時、泳げる人はどんどんクリアして自由時間になっていくのに対して、私はいつまでもクリアできず悲しかった 25m泳ぎきること テストで溺れながら泳いだ</p>

表6 いままでの水泳授業で一番印象に残っていること

【流れるプール】
<p>みんなで波を作った みんなで同じ方向に回って流れを作るのが楽しかった 流れるプールを作る時に溺れかけた 手作り流れるプール みんなで水の流れを作って波のプールや流れるプールを作った みんなで水の中を歩いて水流を作るやつで、背が小さくて溺れそうになった</p>
【水遊び】
<p>小学校低学年のときに、教員がプールに投げ入れたおもりを潜って拾い集める授業が楽しかった 担任の先生にみんなで群がって行って1人ずつ放り投げられた 小学校低学年のときの水遊び 遊んだこと だるま浮きのような活動が楽しかった</p>
【泳げるようになったこと】
<p>泳げるようになった瞬間 小学一年生のときは水が嫌いで泳げなかったのに、小学6年生の頃にはクロールで25m泳げるようになった</p>
【リレー】
<p>リレーで足を引っ張った リレー</p>
【その他】
<p>着衣水泳 プールにたくさん虫がいた 丸1時間(45分)泳いだこと 1km泳がされた 足にフィンのようなものをつけて泳いだ 水泳を習っている人とそうでない人との実力差が顕著に現れる分野だと思った</p>

4. まとめ

本研究は、教員免許状取得希望者を対象に、水泳授業における過去の経験や水泳に対する意識及び泳力について調査を行うことであった。その結果以下の知見を得た。

- ◆ 水泳授業の実施は、小・中・高と校種が進むにつれ実施率が下がることがあきらかとなった。
- ◆ 水泳を得意としている者約40%、好きな者約45%、授業を上手に行えると回答した者約25%であった。
- ◆ 着衣泳の経験あり約45%、スイミング経験あり約43%であった。
- ◆ 可泳距離とスイミング経験の関係から、スイミング経験と泳力には関係が見られた。
- ◆ 自身のこれからの水泳指導について、自身の泳力や水に対する不安、恐怖感が抽出された。
- ◆ 今までの水泳授業に対し、泳力、指導、環境についてネガティブな感情をもっていた。
- ◆ 印象に残る水泳授業として、泳法の指導よりも、水遊びに関することが抽出された。

以上を踏まえ、これからの教員養成課程における水泳指導法について検討を行う必要がある。

5. 謝辞

本研究に協力いただいた、本学教育学部学生の皆様に御礼申し上げます。

6. 文献

- 1) Re-science ベネクス (2022) 「スポーツ・サステナビリティ白書2022」 Vol. 5～日本の水泳人口データ～ (参照日：2024年8月31日)
https://recoveryscience.jp/date_2022_vol-5/
- 2) ベネッセ教育総合研究所 (2024) 2024年版小学生に人気の習い事ランキング！平均費用や習っている数も紹介。(参照日：2024年8月31日)
<https://benesse.jp/kosodate/202403/20240329-1.html>
- 3) 警察庁生活安全局生活安全企画課 (2023) 令和5年夏期における水難の概況。(参照日：2024年8月31日)
https://www.npa.go.jp/publications/statistics/safetylife/r5_kaki_suinan.pdf
- 4) 文部科学省 (2014) 『学校体育実技指導資料 第4集 水泳指導の手引き (三訂版)』
- 5) 寺本圭輔・家崎仁成・古田理郁・平野雅巳・村松愛梨奈・三浦唯・瀧本歩 (2017) 小学校水泳授業の現状と児童および教員の意識に関する検討。愛知教育大学教科開発学論集, 5: 83-90.
- 6) 川喜田二郎 (1976) 問題解決学—KJ法ワークブック。講談社。
- 7) 澤田有里 (2020) 中学校・高等学校における水泳授業の現状—青森県の現状に着目して—。弘前大学教育学部卒業論文。
- 8) 財団法人日本水泳連盟 (2002) 水泳指導教本。大修館書店。
- 9) KANKO (2023) 中高生の「水泳」の授業に対する意識。(参照日：2024年8月31日)
<https://kanko-gakuseifuku.co.jp/media/homeroom/vol208>
- 10) 三宅信花 (2003) 大学体育専攻学生における水泳学習での泳力を規定する心理的要因。日本体育大学院修士論文。
- 11) 海上保安庁 (2018) 着衣水泳指導。(参照日：2024年8月31日) <https://www.kaiho.mlit.go.jp/04kanku/yokkaichi/1-0/e3-01/tyakuisuiei.html>
- 12) 中学生白書 Web 版 (2020) 中学生の日常生活・学習に関する調査, 7. 習い事について。(参照日：2024年8月31日) <https://www.gakken.jp/kyouikusouken/whitepaper/j202008/chapter7/01.html>
- 13) 田場昭一郎・平野雅巳・松波勝・佐藤功一・山口祐一郎 (2017) 大学の水泳教育に関する実態調査：福岡大学スポーツ科学部の学生の泳力について。福岡大学スポーツ科学研究, 47 (2): 11-22.
- 14) 三宅信花・益川満治・西條修光 (2004) 体育専攻学生における泳力と原因帰属、有能感、不安感の関連—性差の比較から—。日本体育大学紀要, 33 (2): 53-61.
- 15) NHK (2022) 学校のプールが廃止に？老朽化や費用問題などで変わる水泳授業。(参照日：2024年8月31日)
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220729/k10013728981000.html>
- 16) 朝日新聞デジタル (2023) 水泳の授業、民間への委託進む 公立小中学校で1割実施。(参照日：2024年8月31日) <https://www.asahi.com/articles/ASR7F6X89R73OIBE002.html>

(2024. 9. 2 受理)